

るのは入学試験が容易ではない。ところが、東大の入試条項が発表されると、何とありがたいことに文学部は入試なしである。どうしてそうなったかというと、その年度の東大の入試は、これまで文学部なら英文科、美学美術史科といった各科別に試験があり、受からないと第二志望、第三志望に欠員があればそこへ廻される。それも駄目なら入れない。そういう試験制度であったが、この年度は、文科一本で三百人という新しいやり方になつたところが文科希望の志願者総数が合計すると三百人に足りない。それで全志願者はすべてフリー・バスということになつたのである。おまけに私の第一志望の美学美術史科は定員十五名のところへ志願者十三名。この方も私はフリー・バスであった。

「おい、東大行くなら試験勉強しろよ」と同級生から注意されていた私であつたが、一向に準備をしない私はフリー・バスで東大入学が決まつたのである。三高から大学へは、京大志望が多かつたが、東大もかなりいた。その連中の大半は、法・経といった志願者であり、彼らの目前には入試の難関がひかえている。みな必死で勉強しているわけである。そこへなまけ者の私が悠々とフリー・バスで前途安泰というわけである。何とも運のよい私であつた。そんな次第で卒業試験もすみ、休暇になつた。私は兄に東大へ入ることをパリま

で手紙をし、兄からも許可の返事がきた。
一九二九年三月、私は無事に三高を卒業した。東京での下宿は、文学仲間の一年先輩の植村収と同居することに決めた。万事ととのつた。

山宣の死

三月六日の朝、私は起きて新聞をみると、山本宣治代議士が殺されたと大きく報道している。びっくりした。実は、その日私は、ナップ（全日本無産者芸術団体協議会）の関西地方協議会に出席することになつていた。ナップ（NAPF）は、一九二八年に芸術団体連盟として結成されたプロレタリア芸術運動の連合体で、その年末に団体協議会に再編成され、関西でも大阪、京都、神戸にそれぞれ地方協議会ができる、この日は東京の本部からオルグとして派遣された劇作家の久板栄二郎の提唱で、最初の関西協議会が開かれることになつていた。私は京都の作家同盟と映画同盟に籍をおいていて、この日の協議会に代議員で出席することに決まっている。ところへ山宣の死が報道されたのである。

その日の集合地は、京都市外の淀の城址であつた。三条京阪から京阪電車で淀まで行くのだが、私は山宣

部落問題のうちと

6

山宣前後

北川鉄夫



フリーパスで東大へ

二度づとめをした三高生活もいよいよ終りをつげるときがきた。五年間の三高生活は、私の生涯の方向を形成したといつてよい。当時のいい方によれば、「赤」の「社会主義者」に私はなりつつあつたようだ。昭和三年の晚秋のころ、兄の上官である京大の齊藤大吉先生が、ひよっこり学校の教室へ私を訪ねてきた。齊藤先生とは兄の指示で時々先生の自宅へうかがい顔なじみになつていた。先生は私をみつけると外へ呼びだし、「君、このごろ大分桃色じみてくるそうじやないか」といった。「森校長から電話があつてきたのが、兄さんに心配かけるなよ。適当にやりなさい。気をつけなさい」というのである。「ハイ」と返事する外はないので、頭を下げた。齊藤先生は微笑をうかべながら帰つていった。ブタ箱入りで警察が学校へ通告したのに違いない。それで私は気をつけたわけではなく、適当にやることにしただけである。そんなことで、「桃色じみた」私になつたわけだが、別に卒業に支障がでたわけなく、私は大学を東京にするか京都にするかを考えた。劇や映画のことをやるなら、やはり東京大学へ行こうと肚を決めた。しかし、東大に入

の死の報道から、これは注意が必要だととっさに思つた。というのは、山宣の遺宅のある宇治へは、この京阪電車で行くのが一番便利だから皆が乗る。警察は特高を京阪三条駅に張らせてあるにちがいない。こちらは山宣宅へ行くのではないが、同じ駅から行く。これはまずいと思ったので、京阪三条駅でなく四条から乗ることにきめ、とりあえず三条駅へ行くと案の状、特高らしいのが立っている。それでこちらは縄手通りを下つて、四条駅から乗つた。こういう配慮は、戦前の運動家に共通したものであった。淀で降り、目の前の淀城址へ入つた。そして、ほば集つたところで、淀川の川岸へ歩きだした。ハイキングの一団という形である。やがて、しかるべき川岸の草原へおちつき、車座になつて会議を始めた。あたりは草の萌えだした早春の風景がひろがり、私たちの外に人影はない。

会議は、当面の関西のナップの組織強化ということであつたが、何しろ今朝の山宣の死の報道である。本題が片づくと、すぐ山宣のことを問題にした。そのとき、向うから自転車を飛ばしてくる人の影が見えた。みなは緊張したが、近づくとそれはナップ仲間の藤田という同志社大の学生であった。

藤田は、宇治の山宣宅におかれた山宣労農葬の本部から連絡員として、自転車を飛ばしてきたのである。

「しののめ暗く反動の 刀に同志は倒れ」という二節からなつた追悼歌が採用された。この二節の歌詞はすぐ葬儀委員会本部で印刷し、配布された。小型のうす赤いザラ紙に、この歌詞は刷られていた。私には思い出深い印刷物である。戦後、私はこの印刷物が、京都府下の亀岡のある農民組合員の家からみつかつたといふことを教えられたことがあるが、実物は見ていない。この歌詞は、戦後、西尾治郎平・矢沢寛編の『日本革命歌』（声社刊）の中に収録されている。もつともこの歌詞は、当時すぐ内務省で発禁になつてゐる。

5. 花やしきに籠城

山宣の家は旅館業で、浮舟園・花やしきといい、宇治川沿いにある宇治で筆頭の高級旅館であった。今日の花やしきは川を直接にのぞむ新館ができて、旅館のしごとにはもっぱらこの新館があつてられているが、山宣葬が行われた当時は、この新館と道をへだててある旧館が、花やしきそのものであり、ここで客を泊め、宴席もあつた。そこが葬儀の本部にあつたのだから、せい沢といえればせい沢だが、たくさんの人たちが出入りするのを、宣治の母の気丈な多年さんがとりし

きつていた。

九日の朝、東京から山宣の遺骨が遺族とそれを守る人々の手で帰ってきた。京都駅——今の駅はそのごの新築である——の駅前広場はいっぱいの人出であり、私もその中にいた。労働者、農民、市民など多くの迎える人々の中に、あご紐をして物々しい警官が列び、特高の私服姿がその中をうろうろしている。時々、騎馬巡查が駆けめぐる。追悼歌が群衆の一角から聞こえてくる。到着した遺骨は、すぐさま臨時につくられた駅前広場の祭壇へ安置されると、遺族、小岩井淨葬儀委員長らがつぎつぎに追悼の手を合わせた。日本共産党のビラがまかれた。まき手はうまく脱出したらしい。やがて遺骨は再び駅に入り、宇治行きの列車に乗つた。私も乗つた。窓から見る山城平野は冬枯れていたが、誰かが列車の窓から白いのぼりを出したので、白いはためきが遺骨の運ばれているのを示していた。窓外を見ると、田の畔に立つた一人の農民が手を合わせている。山宣に指導された農民組合員であろう。肅然たる思いであった。

列車は宇治駅に着いて、花やしきへ向つた。長い列が遺骨を中心に延々と宇治の街を進んだ。この情景は、この日撮影した十六ミリ・フィルムの「山宣労農葬」に撮られているので、ぜひ見て欲しい。沿道には

彼は、一座に加わると、すぐ報告を始めた。それは葬儀団本部からのナップへの要請であった。山宣の遺骨は、東京の告別式を終つて、九日に京都に帰つてくる。そして、京都の葬儀は三月十五日、京都の基督教青年会館で行う。その一週間の間、ナップは葬儀の記録映画をつくる、山宣追悼歌をつくる、さらに遺宅への追悼客に追悼歌の歌唱指導をする、追悼歌は誰でもすぐ歌えるよう、「赤旗」の曲に即して歌詞をつくる、できれば即席の追悼劇もやつてほしい、といった内容であつた。

会議は、すぐ労農葬対策会議にきりかえてすすめられた。映画製作は映画同盟ですぐ準備に入る。追悼劇は青服劇場を中心と考える。作詞は作家同盟で担当、とすることになった。そして作詞は、「拷問に耐える歌」の一作で高く評価されている京大生の詩人の田木繁と私で相談することになった。そして葬儀の当日まではできるだけ皆が山宣宅に泊つて、歌唱指導や追悼劇の脚本づくりをやろうと申し合わせて散会した。

偶然の一一致とはいえ、これらの葬儀委員会の要請にこたえて、山宣宅での芸術活動がやれたのは、この日がナップの協議会とぶつかつたことである。私と田木とはすぐ京都へもどり、誰の家だか忘れたが、同盟員のところで作詞にかかつた。そして、結局私の作った

ギッシリ宇治市民が列をつくつて遺骨を迎えていた。

この日から、十五日の葬儀当日まで、私は花やしきに寝泊りし、六日の決定に従つて歌唱指導や追悼の即興劇の脚本書き、映画撮影の協力などをナップの仲間たちと精力的にやつた。ナップの仲間は、みな私と同じように寢泊りしたが、こうのことになつたのは、一つには宇治の町は、国鉄か京阪電車の宇治駅を押えると、戸口をふさがれたような形になる。警官がこの二カ所を張つていて、顔の知られた人は捕まつてしまふ。籠城やむなしであつた。中には、宇治駅の一つ手前か一つ乗り越すかして降り、歩いて宇治に入り、花やしきの裏山から山をかきわけて入つてくるという人もいた。「××がいま京阪でやられた」「あいつもうつかりしてゐるな」と、情報が絶えない。十四日の夜、集つてゐる弔問客を前に追悼劇がやられた。青服劇場員を中心に私も出演した。久板や私が前の日に書いた即興劇で、出演者は口移しでセリフを覚える。いざ、やるとセリフに詰まるのも出でてきたが、単純明確に脚本はつくつてあるので、ごま化すまでもなく、パッとアドリーブが出て、五場の劇は拍手の中に終つた。

この即興劇の成功は、その後大いに評価され、労働争議や小作争議に活用できると、その経験談をのちにプロット（劇場同盟）の機関誌に書かされた記憶がある。久板や私が前の日に書いた即興劇で、出演者は口移しでセリフを覚える。いざ、やるとセリフに詰まるのも出でてきたが、単純明確に脚本はつくつてあるので、ごま化すまでもなく、パッとアドリーブが出て、五場の劇は拍手の中に終つた。

て、私は、作詞の一節の「祭壇守るわが同志（とも）」の怒りは炎と燃えて 赤旗を掲げ三月の 嵐を衝きて進む……が、文字通りのことになつた一致に思いの高まるのを覚えた。殺された方の人の葬儀を、元凶である国家権力が襲う。これが権力の正体だということをまざまざと知つた。夕方近く、私たちは一人一人巡回が隨いて、京都市内の堀川署まで送られ、その道場で、京都市の特高全員のならぶ前に列をつくらされた。「顔見せ」である。そして全員釈放された。帰りに市電に乗ると、特高の西山警部が同じ電車に乗つた。そこでちょうど三人三高卒業組がいたので、西山に電車無料に車掌と交渉しろといつた。西山は困つた顔をしていたが、しぶしぶ車掌に何か話しかけていたが無料になつたらしい。降りると、私たちは車掌さんに「ありがとう」といて西山の顔をみると、しぶい顔をしている。無料ほど安いものなしとばかり、私たちはそのしぶい顔を尻目に家へ帰つた。お粗末ながら、しつべ返しをしたわけである。

いよいよ東京行きである。私は四月早々に東京へ行くことを決めた。ある日、私のところへ級友がやつて

る。

山宣葬当日

十五日になつた。山宣葬の当日である。晴れた日であつた。早朝から準備に入り、出発になつた。九日の逆のコースを、国鉄宇治駅から列車で京都へ、京都駅から三条柳馬場の葬儀会場である青年会館へと行くのである。列がくまれた。私たち学生は若い組として最前列にならんだ。そして参会者、遺族と葬儀団本部の幹部たち、さいごがまた参会者たちであつた。九日と同じように沿道には市民が小学生もふくめて追悼の列をつくつてゐた。しかし、まだこの他にもいた。制服の警官、そして私たちの列の脇には特高がピッタリとくつついてゐる。私の脇には、先にフィルム爆弾事件で私を警察に連れていった松浦という川端署の特高がついてゐる。

葬列は宇治駅に近づいた。ちょうど、そこは宇治警察署の前である。そこへかかると突然特高たちは私たちに飛びかかって、警察の中に連れこんだ。アツとう間のことであつた。そして、ブタ箱へ入れられた。二十人前後はいたろうか。警察はこの暴挙を事前に計画していたのであろう。汚い粗末なブタ箱は誰も入つ

きて、森校長が君に卒業証書を早くとりにくるようにといつていいたよ、と伝言をつたえた。ああ卒業証書があつたのかと思い出したが、一日、家を出るとバッタリ森校長に出会つた。まだ証書をとりに行つてなかつたので、困つたと思いつつお辞儀をすると、校長は温顏を少しほころばせて「君、早く証書をとりに来なさい。明日来るかね」といつたので、止むなく「行きます。すみません」と詫びた。別に支障があるわけではないので、翌日学校へ出て校長から証書を受けとつた。校長室を出ると、ちょうど佐藤学生主事が廊下を向うへ歩いていく。こんな奴につかまつたら、また最後のお説教を食うぞと、急いで廊下の反対の出口へ向つた。たしか前年の昭和三年ごろから、高校には思想善導と称して、思想対策の学生主事をおきだした。佐藤はその専任主事で、私たち「赤い」学生を眼の敵にして看視だした。一方で学校には軍事教育担当の古手の軍人を配置だしていた。木銃をかついでオイチニ、オイチニとやるわけである。私は背が低いので列を組むとビリッ尻の方になる。それでよく教練の途中に後尾であるのを幸い、ズラかつたものである。思想弾圧と軍事教育とは、この時期に両々相まって、教育の反動化、軍國主義化の促進の二つの柱になつていつた。